

# 中学校英語科における

## 「伝えたい」気持ちの言語化を促す授業実践

### —Willingness to Communicate の形成過程に着目して—

坂井久侑花（教育実践コース）

#### 1 はじめに

##### (1) 研究の背景

中学校学習指導要領外国語編（平成 29 年度告示）では外国語におけるコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すとされており、積極的なコミュニケーションの姿勢と言語活動が重視され、実践されている。一方で、1 年次の国立大学附属中学校での教育実習を通して、他の授業では自分の考えを意欲的に伝え合うが、英語の授業では消極的な姿を示す生徒が多いことを観察した。したがって、「伝えたい」という気持ちを伴った行動を促す授業の必要性があると考えた。

##### (2) 研究の目的

本研究では、生徒が英語を用いて自ら進んで他者と対話しようとする態度である **Willingness to Communicate**（以下、WTC）の構成要素を含む授業を構想し、実践する。生徒が WTC を伴いながら自分の考えを他者と伝え合う姿を目指して、実践を行い、中学校英語科の授業の在り方を検討することを目的とした。

#### 2 WTC の概念モデルを基にした授業実践

##### (1) WTC 概念とは

Yashima(2002)は日本人英語学習者の英語使用頻度には WTC が関係していると唱えている。以下、図 1 は Yashima (2004) が示す WTC モデル図である。

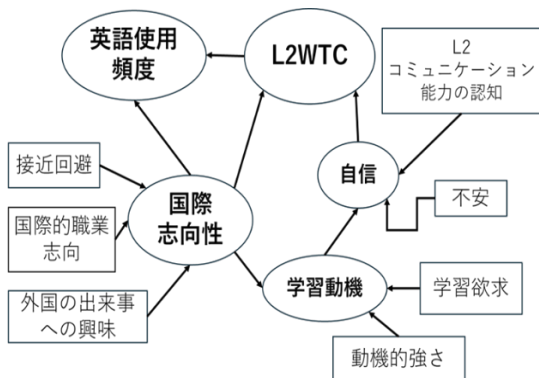


図 1 Yashima(2004)WTC モデルの解釈図  
(坂井作成, 2026)

図 1 より、WTC（図では L2WTC と表記）が高いほど英語使用頻度が高い。外国への興味や肯定的態度である国際志向性と第 2 言語コミュニケーションに対する自信が WTC に直接的な影響を与えることが示されている。また、国際志向性は学習動機にも影響を及ぼしている。

##### (2) WTC と関連した英語科授業の先行研究

まず、WTC モデルにおける国際志向性へ働きかけるためには、授業において英語を使用する目的意識を形成できるよう、必然性・具体性・自己関連性・自由度を高めた活動を設定することが重要である（田中・田中, 2008）とされている。さらに、話し手自身の考えや意見を相手と伝え合うメッセージレベルのコミュニケーション活動が有効である（渡邊, 2022）こと、メッセージレベルのコミュニケーションは学習動機につながる（大下, 2009）ことが指摘されている。

次に、第 2 言語コミュニケーションの自信には、コミュニケーション能力の認知が正の影響を与えるとされ、中学生には成功体験を積む工夫が求められる（青山他, 2020）と指摘されている。一方、不安感の軽減には経験の積み重ねと安心感が必要である（藤田, 2017）と主張されている。

これらの先行研究を考慮した授業を構想し、実践することで生徒が「伝えたい」という気持ちを言語化できることが重要であると考えた。

#### 3 実践 1 : WTC の向上要因と阻害要因を明らかにするための授業実践

##### (1) 目的

実践 1 では、WTC の構成要素のうち、どのような要素が生徒の実際の WTC 向上要因及び阻害要因となるのか検討することを目的とした。

##### (2) 実践の概要

令和 6 年 7 月に国立大学附属中学校 1 学年 2 学級を対象に授業を実践した。単元名「Our New Friend」である。以下、表 1 は本時の学習指導計画である。

表1 本時の学習指導計画

	実践①	実践②
導入	本時の課題を提示	生徒とやり取りしながら本時の課題を提示
展開	モデル文の提示 ペアで伝え合う 考えを共有する 英文を書く	モデル文をつくる 共有して考えを整理する ペアで伝え合う、考えを共有 英文を書く
終末	振り返り	振り返り

実践①を行った後、改善点を踏まえて実践②を行った。

### (3) 結果

実践①の導入では、生徒が身近な資料やALTに興味を示す様子が見られた。本時の「ALTの困りごとを解決しよう」という課題を提示するとアイデアを発言する様子があった。生徒AとBのペアワークでAは筆者が提示したモデル文を参考にしながらジェスチャーを交えてやり取りしていた。

一方で、資料を提示したときやワークシートを配付した際には、生徒の興味が教材に集中してしまい教師の指示が通らないときがあった。

実践②では、その課題を改善するため、興味の高まりを生かして教師が英語や日本語での質問をして生徒とやり取りや確認を行った。やり取りを行うことで生徒からの反応が増えた。

モデル文は提示せず教師は生徒にどう紹介できるかと尋ね、使える表現を共に考えた。すると生徒Cから「This is」という反応があったため、小学校の既習事項と関連付けて指導した。生徒からは「やったことある」という肯定的な反応が返ってきた。一方で、モデル文を明示しなかったことで英語を話すときや英文を書くときに困る生徒がいた。また、教師に答えを聞く生徒や、英語で話すための原稿を作成することに時間を費やし話す活動が実行されない生徒がいた。

ペアでやり取りをする前にどんな伝え方ができるか確認する時間をとると話す順番を考えたり、友達の良い考えをメモしたりする姿が見られた。

### (4) 考察

本実践から、WTCを促進する要因として四点が示唆された。第一に、伝える目的と相手を明確にすることである。ALTの困りごとを解決する課題設定により、生徒は学習に興味・関心をもって主体的に取り組んだ。第二に、教師と生徒の積極的なやり取りである。やり取りを通して課題に対する興味を更に高めたと考える。第三に、既習事項との結び付きである。小学校で学んだ表現を想起させることで、心理的負担を軽減したと考え

る。第四に、他者との共有による安心感である。事前にペアで表現を相談する時間を設けたことで、生徒は自信をもって伝えようとする姿を見せた。

一方、阻害要因としては、生徒の困り感や正解を求める姿から、モデル提示の不十分さ、英語使用への不安感が挙げられる。

## 4 実践2：国際志向性と不安感の低減にアプローチする授業実践

### (1) 目的

実践2では英語に苦手意識のある生徒が話すことへの不安感をなくし、主体的に話そうとする姿が見られる授業づくりを目指した。そのため、英語でのコミュニケーション不安を軽減するためのスモールトーク（英語での短い会話練習）の設定、国際志向性に関する外国人留学生とのコミュニケーション場面の設定を行った単元構想を基に授業を実践し、分析・省察を行った。

### (2) 実践の概要

令和6年12月に公立中学校1学年1学級を対象に英語科授業を実践した。単元名「Wheelchair basketball」であり、表2は学習指導計画である。

表2 学習指導計画

次(時数)	学習内容
第1次(2)	単元課題を理解し、単元の見通しを立てる
第2次(6)	車イスバスケットボール (Be動詞の過去形、過去進行形)
第3次(3)	留学生へのビデオレターをとる

### (3) 結果と考察

国際志向性に関連する第1次・第3次の学習活動及び不安感に関連するスモールトーク場面に着目して分析する。

#### ① 国際志向性に関する授業場面について

第1次では、パフォーマンス活動の相手となる留学生からのビデオレターを視聴した。留学生の服装についての興味を示す発言があったが、途中で聞くことを諦める生徒もいた。多くの生徒が内容を理解できなかった要因として、①語彙や内容が難しく、十分な支援を行えなかったこと、②授業のねらいが曖昧で、何を聞き取るべきかを明確に示せなかったことが挙げられる。追加1時間の授業を実践し、聞き取りポイントを提示、再度ビデオレターを視聴すると、留学生の発表内容について興味を示す発言があり、理解が興味を引き出すことが考えられる。

第3次では、留学生に送るビデオレター作成に向け、構想・撮影・振り返りを段階的に行った。

10 時間目のビデオレターの撮影では、取り直しをして積極的に話そうとする姿も確認された。11 時間目には自分の動画を見直し、改善点を考え、再撮影したことで、話し方を工夫する生徒が増加した。特に、具体的な改善視点を示したことや、自分の課題に気づいたことが、安心感と発話意欲の向上につながったと考えられる。

以上より、相手意識を伴う活動と具体的な支援が、生徒の英語で話そうとする姿勢を支えると示唆された。

## ② スモールトーク場面について

英語の授業に参加できないときや、否定的発言をするときがある生徒 D は英語に苦手意識がある。ペアの生徒から教えてもらいながらモデル文をまねて話していた。スモールトーク後の全体共有場面では自分の考えを挙手して発表する姿が見られた。D の話すことへの抵抗感が、モデル文やペアからの支援によって和らぎ、自信をもっている様子が伺える。

生徒 E と F のやり取りでは、既知の単語を使いながらやり取りを続けようとする姿が見られた。質問し合ったり、具体的説明を加えたりして英語で話すことに慣れていく様子があった。

## (4) 成果と課題

本研究では、英語に苦手意識をもつ生徒の不安を軽減し、WTC を高めることを目指し、外国人留学生とのコミュニケーション場面とスモールトークを取り入れた単元を実践した。

留学生のビデオレター視聴では、聞き取る視点やキーワードを明確にしたことで内容理解が進み、生徒が興味をもち質問する姿が見られたことから、「聞きたい」「伝えたい」という意欲を高める効果が確認された。

スモールトークを通して英語で話すことに慣れ、自信をもって発話しようとする生徒の変容も見られ、不安軽減に一定の成果があった。

一方で、スモールトークで高まった意欲が主活動に十分つながらず、活動の目的や関連性が生徒に明確に伝わっていなかった点が課題として明らかになった。今後は、生徒が何を、どのように行うのかを明確にし、スモールトークと主活動が往還的につながる単元構成と支援の工夫が求められる。

## 5 実践 3 : WTC を伴った自分の考えを伝え合う行動を促す授業実践

### (1) 目的

WTC の形成過程に着目した授業を実践し、生徒が自分の考えを伝え合う姿を促すことを目的とした。

### (2) 実践の概要

令和 7 年 7 月に公立中学校 3 学年 1 学級を対象に英語科授業を実践した。単元名「Bollywood movies」であり、表 3 は学習指導計画である。

表 3 学習指導計画

次 (時数)	学習内容
第 1 次 (1)	単元の課題を理解し、目標を設定する
第 2 次 (6)	インド映画を知ることを通して映画に関する自分の考えを伝え合う。(後置修飾)
第 3 次 (10)	ALT への意見文を書く

実践 3 では、実践 1・2 の結果を基に具体的な 3 つの手立てを考えた。

- ア. 必然性・具体性・自己関連性・自由度を高めた単元構想
- イ. 双方向やり取りに着目したメッセージレベルのコミュニケーション
- ウ. 達成度を可視化する振り返り

### (3) 結果と考察

#### ① 授業実践の結果と考察

ALT からのビデオレターを視聴し、「ALT に日本のアニメ映画を字幕と吹き替えどちらで見るとよいか意見を伝える」という本単元の課題を提示した。実際に字幕版と吹き替え版のアニメ映像を視聴し、自分や ALT の立場を考えて伝えようとする姿があったことから単元課題の必然性、具体性、自己関連性が高まり、学習意欲を向上させたと考える。スモールトークでは、やり取りを続ける反応例をまとめたワークシートを配付した。反応例を参考に英語でやり取りを続けようとする姿が見られた。自分で選択できる自由度がある一方で、戸惑う様子も散見された。

スモールトークで、肯定的反応を互いに掛け合いながらペアでやり取りをする姿が見られた後、本時の主活動でのやり取り場面で自分自身の考えを「良い」と肯定する姿が見られた。スモールトークで学習してきた表現や反応例を参考にして本時の主活動でも自分の言葉でやり取りを続けようとしていた。相手の話した内容に対する質問をする、言えなかった単語を自発的に調べようとする姿が見られた。双方向やり取りに着目したメッセージレベルのコミュニケーションが生徒の「伝えたい」という気持ちを行動につなげたと考える。

また、単元の主活動では自分が言いたい言葉が伝えたい意味であるかどうかを確認する様子が見られた。スモールトークで学習した表現を使って

単元課題の活動である ALT への意見文を書く姿や自分の経験談を取り入れて工夫して伝えたり、書いたりする様子が見られた。10 時間の学習を通して、授業内の複数のコミュニケーション活動が相互に作用し WTC の向上が促されたと考えられる。

達成度の可視化とその自己評価の振り返りにより、自分ができたことへの喜びや頑張りたいという意欲が表現されていた。生徒が自分のコミュニケーション能力を認知することで自信や意欲につながったと考える。

## ② WTC のアンケート結果と考察

実践した単元の前後に実施した WTC およびその周辺要因（国際志向性、学習動機、L2 コミュニケーション能力の認知、外向性、不安感）に関するアンケート結果を t 検定により分析したところ、国際志向性、学習動機、L2 コミュニケーション能力の認知、WTC において、有意な得点の上昇が認められた。実践した単元が上記 4 つの要素の向上に有効であったと考えられる。

不安感について筆者の仮説と異なったため、不安感の尺度の得点が減少した抽出生徒の補足的分析を行った結果、肯定的相互作用の経験や支え合うことができる環境があった。これらは不安感の軽減には影響がなかったが自信の向上に影響を与える可能性があると考えた。

## 6 総合考察

本研究の成果を以下図 2 に示す。

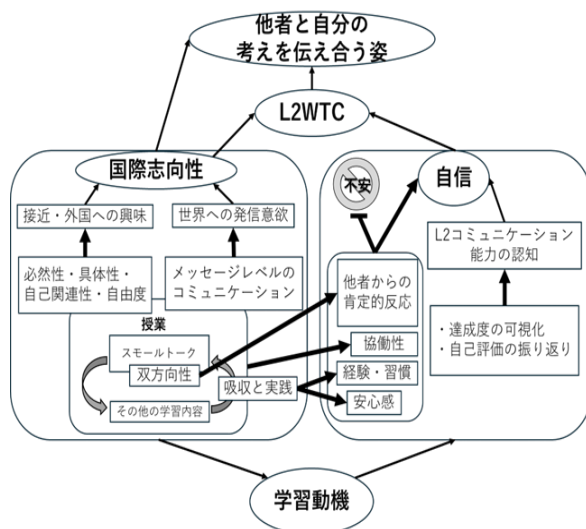


図 2 Yashima (2004) の WTC モデルに照らした研究結果 (坂井作成, 2026)

図 2 より、生徒が自分の考えを伝え合う姿は WTC に支えられて現れることが示唆される。WTC には、国際志向性、自信が直接的に作用す

る。国際志向性は学習動機に作用し、学習動機は自信に作用する。国際志向性は必然性、具体性、自己関連性、自由度を高めた、メッセージレベルのコミュニケーションを重視した授業構成により、授業内でのコミュニケーション活動が相互に作用し、外国に対する前向きな気持ちや興味が高まる。さらに、世界への発信意欲が向上する。自信は、L2 コミュニケーション能力の認知や他者からの肯定的反応、協働性、経験の蓄積と習慣化、安心感によって高まることが示唆される。

WTC は、特定の一つの活動や要素のみによって発揮されるものではなく、授業全体を通して各 WTC 向上要素が作用し影響を与えると考える。このことから、本研究を通して、WTC は、生徒の心理的・関係的状态を表す概念であり、授業内での活動構成や相互作用、学習環境によって変化し得るものであると考えられる。

生徒が英語でコミュニケーションしようとする姿の背後には複数の要因が絡み合い存在しているため、生徒の状態を実践的に捉える視点が英語科教師に必要なだろう。

本研究では実際の外国人との交流機会を設けられなかった。国際志向性の高まりに実体験が不可欠であるのか、仮想場面でも可能かは今後、更に検討する必要がある。また、学級全体への支援にとどまり、個人差に応じた支援は十分に検討できなかった。今後は、生徒一人一人の特性や状態に応じた支援を行うことで、どのような変容が見られるのかを明らかにしたい。

## 引用文献

- 青山拓実, 島田英昭, 菊原健吾, 酒井英樹 (2020) 『中学生英語学習者を対象とした Willingness to Communicate モデルの構築』, 中部地区英語教育学会紀要, 巻 49, pp. 17-24.
- 藤田卓郎 (2017) 『英語が苦手な学習者のコミュニケーションを図ろうとする意思と英語運用能力の育成』 全国英語教育会紀要 28 巻, 2017, pp. 335-348.
- 田中武夫, 田中知聡 (2008) 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』, 大修館書店
- Tomoko Yashima, Lori Zenk-Nishide, Kazuaki Shimizu (2004) The influence of Attitudes and Affect on Willingness to Communicate and Second Language Communication. *Language Learning Volume 54*, 2004, pp.119-152. WILEY Online Library.
- 渡邊真理子 (2022) 『日本人学習者の Willingness to Communicate とコミュニケーション活動における伝達内容 Willingness to Communicate by Japanese Learners of English and What They Communicate Through Speaking Activities.』, 中部地区英語教育学会紀要, pp. 71-78.